

高等小學修身書

陸軍部
陸軍部
陸軍部

卷四

T1A3

22

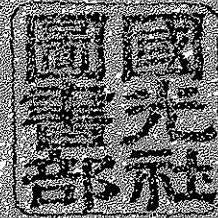
(H55k)

文部省 檢定 校訂

伯爵副島種臣 閱
伯爵東久世通禧 著

高等小學修身書 卷四

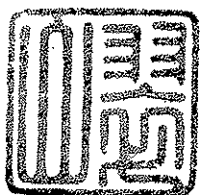
東京 國光社圖書部



修身之要在正心

明治二十五年九月

從一位勲等近衛忠熙



高等小學修身書卷之四終

東久世 通禧 著

副島 種臣 閱

第一 聖德

第一課

觀聖仁慈なる 今上天皇陛下は、つとに、維新
の大業をとけさせ給ひ、國光を、ますます、宇内
に宣揚し、皇祖、皇宗の宏圖を、いよく、恢
弘せさせ給はむ 大御心によりて、日夜、勵精
あらせ給ふ。御聖德のほど、まことに、感泣し奉

るにたへざるなり。我等臣民たるもの、陛下のつねに、億兆を愛撫せさせ給ふ御仁徳と、維新のはじめ、下したまはりし大御諭の聖旨とは、ふかく、感戴し奉りて、寸時も、忘るゝが如きことあるべからず。

御製

萩の戸のはなにやとれる月かけは

賤がかさねもへたてざるらむ

第二課

畏くも、陛下、維新のはじめ、萬民に示諭せさせ給ひたる、大御言に宣はく、

今般、朝政一新の時にあたり、天下億兆、一人も、其の處をえざるときは、みな、朕が罪なれば、今日の事、朕、みづから、身骨を勞し、心志をくするしめ、艱難の先にたち、古、列祖のつくさせ給ひし蹤をふみ、治績をつとめてこそ、はじめ、天職を奉じて、億兆の君たる所にそむかざるべけれ。朕、こゝに、百官諸侯と、ひろく、相ちかひ、列祖の御偉業と繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、みづから、四方を經營し、汝億兆を安撫し、つひには、萬里の波濤を開拓し、國威と、四方に宣布し、天下を、富嶽のやすきにおかむ

ことを欲す。汝億兆、よく、朕が志を體認し、相ひさゝるて、私見を去り、公義をとり、朕が業をたすけて、神州を保全し、列聖の神靈をなぐさめ奉らしめば、生前の幸甚ならむ。

第三課

今上天皇陛下の御仁徳は、ことごとく、述べつくし奉るべきにあらざれども、今、つゝしみて、其の一端を記し奉らむに、陛下には、毎朝、早旦におきさせ給ひ、賢所、天神地祇、八神、および、列聖の神靈を拜せさせ給ふこと、いまた、曾て、一度もかゝせ給ひしことなく、又、ふかく、

皇位を慎重せさせ給ひ、かりそめにも、玉座の外におはしますことなく、坐作進退にいたるまで、ことごとく、節度あらせ給ふ。これ、皇祖、皇宗の遺訓を謹守せさせ給ふ叡慮にぞある。また、日用の御器物なども、一として、御嗜好のものはなく、朝夕の供御も、専、儉素にたがはせ給ふとぞ。およそ、政務に關する文書は、日々に閱覽あらせられて、仔細に推究せさせ給ひ、御疑點のふしぐは、それごとく、御下問あらせられし後、裁可せさせ給ひ、緊急の上奏は、深夜といへども、きこし召させ給ふ事もあり。

明治六年、皇城炎上せしとき、たゞちに、造營しまつらむとせしを、陛下、之とてめさせ給ひて、詔したまはく、朕、前日、回祿の災にあひ、宮殿、これがために蕩盡すといへども、今や、國用夥多のときに際し、造築の事、もとより、之とすみやかにするをこひねがはず。朕が居室のために、民産を損し、黎庶をくるしまはむること勿るべし。汝實美、それ、斯の意を體せよとて、十數年の間、假皇居におはしましき。さて、皇居を造營し奉らむと志けるときにも、ことに、詔して、其の費額を減ぜさせ給へり。仁徳

天皇の古も思ひ出でられて、まことに畏きこととにこそ。

第四課

憲法の草案を、樞密院にて議せしめられしは、をよそ、四ヶ月にわたりしが、其の間、午前十時より、かならず、臨御あらせられ、議官の參集おそき時などは、ことに、侍従をして、うながさせ給ふこともありき。かくて、其の會議、七月下旬にもおよび、炎熱やくが如くなれども、すこしも厭はせ給はず、午後三時すぐるまで、還御あらせられざりき。また、議會開會のときは、日々、

議院の景況を、宸憂あらせられ、深更におよびて、官報局より奉る報告をまち、夜々、御覽せさせ給ひ、豫算の事につきて、衆議院より、上奏せし時などは、ことに、宸憂はなはたしく、つひに、内廷の費をはぶかせ給ひて、いとも畏き大詔をさへ下させ給へり。さて、宮内大臣と、御前に召し、またしく勅り給ひけるは、朕、さきに、内廷の費をはぶき、製艦の費をわぎなはむことを命じぬ。されば、力の堪へ、心のおよばむかぎりは、節約をかさぬべし。されど、朕、ことに、汝に告ぐることあり。朕が、祖宗、列聖の祭

事、および、山陵の費と、皇太后陛下の供御の費とをば、すこしも動すこと勿れど。大臣は、大命の畏さに、涙をふくみて、御前をゑりぞき、これを、宮内の臣僚に宣しければ、みな、感泣に堪へざりきとぞ。

第二 節義

第五課

節義とは、其の守るべき所をまもり、行ふべき事をおこなひ、いかなる艱難辛苦にあふとも、決して、志行を變ぜざるをいふ。たとへば、竹の節あるが如し。竹にして、若、節なからむか。いか

に、眞直なりとも、其の用となさざるべし。人も、亦、かくの如し。いやしくも、節義なければ、世に容れられず、人に信ぜられずして、つひに、世の廢物となりぬべし。

芝蘭は、深山幽谷にありといへども、其の芳を減ぜず。君子は、患難困窮にあふといへども、其の操を改めず。聖學自在

第六課

節義の嗜とは、口に、偽をいはず、身に、私をかまへず、心すなほにして、外に、かざりなく、作法をみたさず、禮儀たゞしく、上にへつらはず、下を

あなどらず、わが約諾をたがへず、人の患難を見すてず、かりそめにも、下ざまの賤しき物語、惡口など、言葉の端にいたさず。さて、恥を知りて、首をはねらるとも、已むすまじき事はせず、つねに、義理を重むじて、其の心、鐵石の如くなるべし。明君家訓

雪ふりて年の暮れぬるときにこそ

つひにもみちぬ松も見えけれ古今集

第七課

藤原光頼は、忠誠の人なり。平治の亂のときに、弟惟方は、藤原信賴にくみして、大内にありし



が、信賴、みづから、大臣大將となり、詔といつは
りて、諸卿を召し、自、第一の座にありて、諸卿、其
の下に列せり。光賴、參内し、之を見て、大にいか
り、彼は、右衛門督なり。我は、左衛門督なり。何ぞ、
かれが下に立つべきと。たゞちに進みて、信賴
の上に座し、笏をたゞし、容をとゝのへ、今日の
議は、衛府督を第一とし、かつ、諸卿の、不參なる
をば誅せられむとか。そは、いかなる故ぞと問
ふ。信賴こたへず。一座黙止す。光賴、左右をかへ
りみ、あゝ、朝參せしは、我が過なりといひつゝ、
袖を拂ひていづ。さて、弟の惟方をよび、汝は、さ

きに、信賴と、同車して、入道信西が首を實檢せりと聞く、汝は、すでに、檢非違使の別當なり。別當は、重職なるに、人の車の後にのれるは、大なる恥辱にあらずやと詰責しければ、惟方、そは、御旨を受けしがゆゑなりと答へぬ。光賴曰はく、我が家は、延喜の朝に仕へてより、十一代におよべども、善政にあらざれば行はず。忠良にあらざれば交らざるに、汝にいたりて、凶逆の人にくみし、家の名をけがすこと、いと口惜しからずや。いま、大貳清盛、大軍をひさるて、信賴を討たむとす。その誅に伏せむ事、近きにあり。

聞く所によれば、信賴、事々に、汝と、相はかるよし、汝、力をつくして、玉體を守護し參らせよといましめ、今、主上、上皇は、何處にたはしますかと問ふ。惟方、主上は、黒戸御所に、上皇は、一本御書所にと答ふ。神鏡劔璽はと問へば、神鏡は、溫明殿に、劔璽は、夜御殿にありと答ふ。また、朝餉間の櫛形に、人影の見ゆるはと問へば、信賴なりと答ふ。光賴、たはいに歎息し、あはれ、かくまでも、君臣の分のみたれたるかな。世はすゑなれども、日月は、いまた、地に墜ちず。宗廟の神靈、いかでか守り給はざらむ。異

國には、亂臣あれども、我が朝には、かゝる例を聞かすと、涙をぬぐひて出でけり。惟方、大に感悟し、過を悔い、天皇を、ひそかに、六波羅に行幸せさせ奉りて、亂、つひに平さぬ。

第三 廉潔

第八課

廉潔とは、爲すべからざることを爲さず、取るべからざるものを取らず、義により、理にあらばひ、正道をまもりて、利害のために誘はれざるをいふ。人は、誰にても、慾心あるものなれば、つねに、義理を以て、之を抑へ、いさゝかにても、

増長せしむべからず。若、之をして、増長せしむる時は、義をやぶり、道を害ひて、不忠不義の人となるべし。

凡、廉潔ならざる人は、恥を知らざるものなり。おのが身に生れつかざる榮華をうらやみ、不義の富貴をのぞみ、人をあざむき、禮をみたり、法をやぶるなど、道にたがひ、義にそむきたることをして、すこしも恥づることなき、之を、破廉恥といひて、世に、もとも、賤しむる所のものなり。かゝる人は、いかに、智識あり、才藝ありとも、頼むに足らず。信するに足らず。人、廉潔なれ

ば、心、悠々として、常に、やましきことなく、富貴榮華よりも、遙にまさりて、樂しきものなり。

ねほそらを照り行く月し清ければ

雲かくせどもひかりけなくに古今集

第九課

青砥藤綱は、廉潔剛直を以てきこえたる人なり。北條時頼、嘗て、鎌倉の鶴が岡の祠にまうでたりしに、夢に、青砥藤綱を用ゐよといふ神の御告ありしかば、明日、藤綱を召して、食邑をあたへたり。藤綱あやしみて、その故を問ひしに、時頼、告ぐるに、靈夢を以てす。藤綱、辭して曰は

く、君、夢の故を以て、臣を用ゐ給はゞ、又、夢によりては、臣を斬り給はむ。かつ、未、國家のために、寸功なくして、賞を受くるは、國をそこなふものなり。臣、愚なりといへども、國をそこなふことをあすに忍びず。時頼、聞きて、ますく、これを愛し、つひに、奏して、左衛門尉をさづけ、引付衆となしたり。時に、北條氏の領地のことにて、地下の公文より、幕府に訴ふることありき。公文が訴ふる所、道理なれども、奉行、頭人、評定衆、みな、北條氏をはかりて、公文を敗訴せしめたり。然るに、藤綱、ひとり、權門におそれず、公

平をまもり、再議して、つひに、公文が訟を勝たしめたり。公文、大によろこび、その徳にむくいむとして、錢三百貫文を、藤綱の庭中におきて去れるに、藤綱、これを見、大にいきりて曰はく、公平に、訴を斷じたるは、汝の爲にせしにあらす。わが裁決の正しくて、褒賞を受くべくば、主君よりこそ賜ふべけれ。ひそかに、汝の錢を得て、喜ぶが如き、汚らはしきものにあらすと。直に、その錢をかへして取らざりき。

第四 度量

第十課

度量とは、胸中、寛裕にして、よく、物を容るゝことを得、また、事をはかり、變にあひて、かろしく、心をうとかさゝるをいふ。人、もし、心に、度量なきときは、事をはかりて、動搖し、變にあひて、周章し、遂に、事業をはたすこと能はざるにいたるものなり。心に、度量あるものは、よく、他人の言を容れて、善をあつめ、惡を去り、以て、大業を果すことを得べきなり。故に、人は、其の心の規模を大にして、或は、無益の事物にかゝづらひ、或は、他人の過失をとがむるなどのことなかるべし。また、事となすにあたりては、苟、小

利を計るべからず。近功を望むべからざるなり。

よど川のよどむと人は見るらめど

流れて深きころあるものを道楽歌合

第十一課

酒井政親は、徳川家康の臣なり。沈勇着實にして、事を處するに、過なきを以て、家康のために寵せられ、つひに、執事となれり。その頃、新に出仕したる士の中に、神谷某といふものありしが、途中、政親にあひて禮せしに、政親は、之を知らずして、答禮をもなさで、行きすぎけり。某、大



にいかりて、之をうらみ、政親を待すること、はなはた、禮なく、容止、つねに、傲慢なりき。家康、これを聞きて、神谷をうとむじ、秩祿千石を與ふべかりしを、是によりて、八百石に減じたり。けなし、家康の意は、神谷をして、みづから、仕を辭せしめむとしたるなり。あかるに、政親は、あきりに、神谷を稱して、増祿あらむことを請ひてやまず。而して、神谷の、已に、傲慢なることは、問はざるものゝ如し。家康曰はく、神谷は、汝に、無禮なるものにあらすや。故に、われ、彼の祿を減じたりしを、汝の、増祿を請へるは、何のゆゑぞ

と。政親、答へて曰はく、臣、君の執事となりしより、茲に年あり。そのあひた、君の家臣にして、いまた、一人も、臣に、無禮を加へたるものなし。臣に、無禮なりしは、實に、彼を始とす。その無禮は惡むべしといへども、その倔强なるは愛すべし。おもふに、彼は、平凡の士にあらず。一旦、増秩のことありて、君の恩義を感ずることあらば、他日、身を捨て、君のために、忠節をつくさむ。よろしく、増して、二千石を與へ給ふべしと。家康、政親の大度を稱し、かつ、沈着なるを以て、その見の誤らざるべきを信じ、千五百石を賜ひ、

神谷を召して、政親の言を告げぬ。神谷、政親の度量に服し、感涙して、その恩義を謝し、いたく、前非を悔いたりといふ。神谷、のちに、軍功ありて、將となり、果して、政親の言の如くなりきとぞ。

第五 貯蓄

第十二課

人の家には、生死病災等にて、不時の費用を要すること、必、あるものなれば、あらかじめ、其の備なくではかなはざるものなり。されば、常に、節儉をまもり、奢侈にながれずして、應分の貯

蓄をなさざるべからず。若、之なくして、一旦、禍災なぞにあふことあらば、ふたゝび、身を立つること能はざるに至らむ。また、貯蓄をなすことは、一身一家の上に取りて、もとも、肝要なるのみならず。國家の上にも、亦、きはめて、太切なることなり。國民たるもの、貯蓄もなくして、やうやく、其の日を支へ得るが如き状態にては、教育もおとろへ、禮義廉恥もすたれて、國の富強は、決して得べからず。若、また、不時の事變れこらば、遂に、かなしむべき境遇に陥ることあらむ。人々、注意せずばあるべからず。而して、貯

蓄の法は、小をつみて、永遠を期するにあり。厘毛の小も、之を忽にせず、積みて、年月をかさぬれば、萬金の太にいたるべし。然れども、義を忘れ、情をかへりみずして、唯、已のみ、貯蓄せむとするが如きは、大に、いやしむべき所爲なりと知るべし。

吉野川 そのみなかみをたづぬれば

むぐらの志づく萩の志たつゆ 道樂歌合

第十三課

毛利重就は、長門國萩の藩主なり。その頃、上下ともに、奢侈に流れ、産業を事とせず。加ふるに、

國中、不時の費用はきのみならず。幕府よりも、用金をあつること悉けかりければ、倉庫つきて、財用、大に、不足せり。こゝに於いて、重就、いたく、節儉をつとめ、身を以て、下をひさる、年を経、て、やうやく、領内の面目を改むるにいたれり。然るに、今まで、風雨水旱のために、土地肥瘠の變異せるものありて、租税、平を得ず、徭役、當をうしなひしかば、重就、有司に命じて、其の廣狹をはかり、其の肥瘠を考へて、ことごとく、之を改正したり。これより、舊額の外に、新に得たる地、數萬石ありたりといふ。重就、之を資とし

我が勅聖なる 天皇陛下の、かたじけなくも、明治二十三年十月三十日を以て、下させ給ひし聖詔は、皇祖、皇宗の遺訓と、臣民祖先の遺風とに徴して、我が國固有の大道を明にし、臣民の志たがひ由る所をまどはざらしめ給はむとの、いとも優渥なる勅旨あり。臣民たるもの、ふかく、威佩服膺し奉りて、造次顛沛にも、之を忘るゝことあるべからず。いま、謹みて、つきぎに、聖諭の要領を叙述し奉るべし。

朕、惟フニ、我が 皇祖、皇宗、國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。

天皇陛下、畏くも、志たしく、臣民にむかはせ給ひ、みづから考ふるには、皇祖の神々より、歴世 皇上の、我が日本國をはじめ開かせたまひしこと、はなはた、宏大悠遠にして、一朝一夕の創業にあらず。また、教を垂れ、政を布き、臣民を愛撫せさせ給ひし御恩徳は、實に、深く、かつ、厚くして、普天の下、率土の濱にいたるまで、及ばざるところなく、達せざるところなし。然れば、臣民たるものは、之を、心に銘して、志ばらくも忘るべからずと宣へるにぞあるべき。そもく、我が大日本國は、太古に、造化の三

神、基業を立て、伊弉那岐、伊弉那美之二神、其の命を受けて、大八洲を區畫經營し、諸物をそなへて、皇祖につたへ、皇祖之を、皇孫瓊々杵尊につたへて、萬世不易の皇統を垂れさせ給ひしより以來、君臣の分、儼乎として立ち、皇化は、國の内外におよび、威嚴は、とほく、海外にかゝやけること、皆、皇祖、皇宗の、國を肇めさせ給ひしことの宏遠なると、徳を樹てさせ給ひしことの深厚なるとに因らざるはなし。

第十五課

我が臣民、克ク忠ニ、克ク孝ニ、億兆、心ヲ一ニシ、世世、厥ノ美ヲ濟セルハ、

我が大日本國の臣民は、皇祖、皇宗の、深く、かつ、厚き恩德に沐浴せるを以て、祖先より、今日にいたるまで、國家に、事變あるときは、身命をなけうちて、よく、忠義をつくし、父母の膝下にありては、よく、孝行をつくし、億兆の人々、心になりて、分離乖戾するが如きことなく、みな、一致協同して、忠孝の大義をれもむじ、道德の大倫をまもりて、身をとさめ、家をととのへ、世界萬國に勝れたる美風をなし來れり。され

ば、東洋の君子國といはれしことはあるも、いまた、嘗て、輕侮せられたることはなし。故に、聖勅、かくの如く宣へるにぞあるべき。

第十六課

會澤安、我が國の臣民が、忠孝に富めることを叙述して曰はく、中古以來、名臣と稱するものは、大織冠藤公、贈太政大臣菅公なり。孝子は、小松内大臣重盛公なり。忠臣は、楠贈左中將なり。古今の孝子、膝下の色養に、愛敬をつくし、喪に、哀をいたし、祭に、敬をいたし、父の志をつぎ、事をのべ、或は、大變にあひて、共に、天を戴かざる

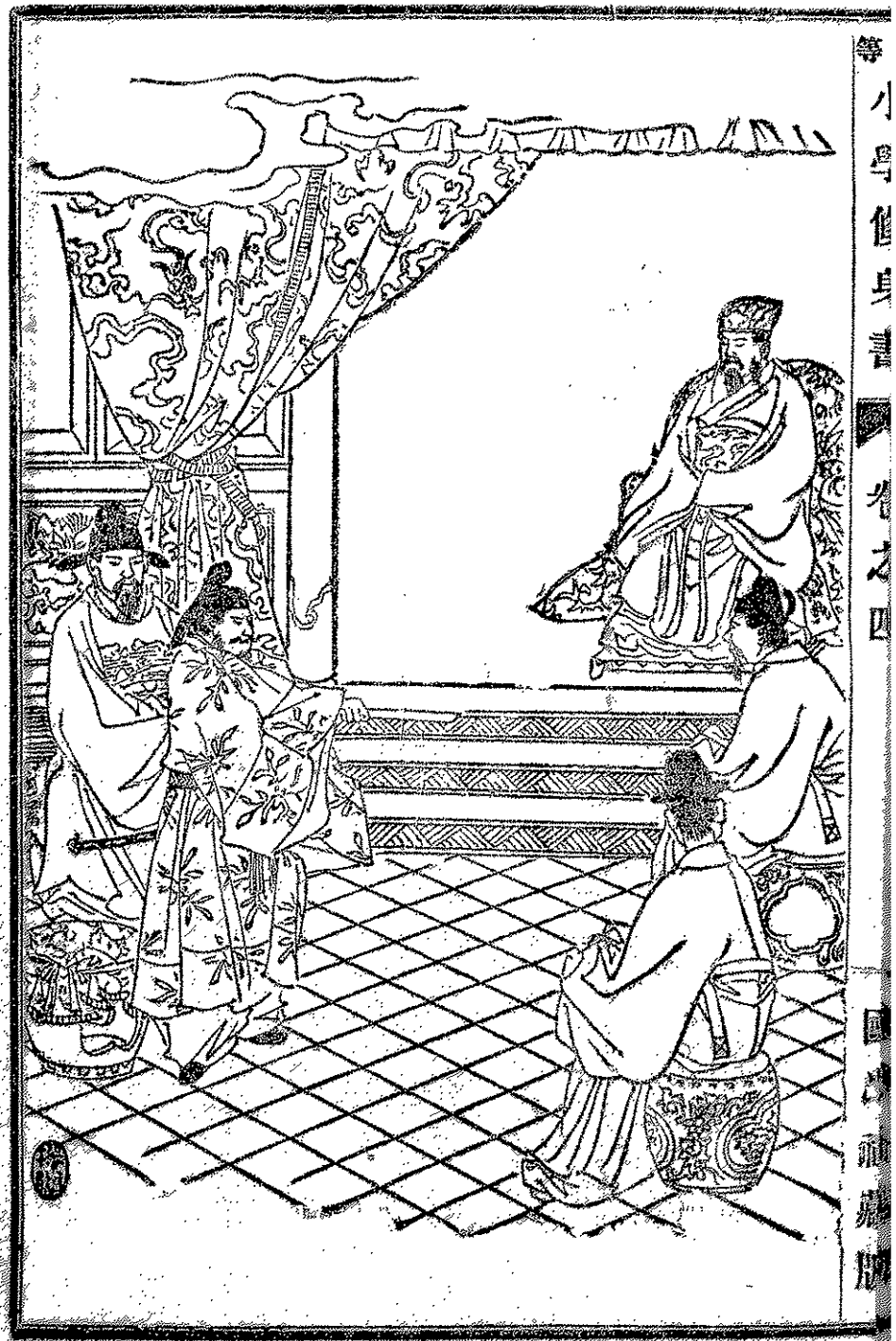
大讐をむくゆる類、人口に鱸炙するもの多しといへども、小松殿の如きは、父入道の、暴横にして、悖逆の事にもおよぶべかりしを、百方幾諫して、不義におちいらしめず、至難の變に處して、忠孝を全くせられし事、古、虞舜の事を稱して、烝々として、をさめて、姦に格らずといへるにもたとふべし。また、古今忠烈の士、大功を建て、社稷をまもり、或は、節に伏し、義に死して、青史に、光輝を垂れたるもの多しといへども、忠勇智謀、兼ねそなはりて、天下後世の模範とすべきは、楠公にぞくものあらず。元弘、建武の

時にあたりて、忠臣義士の、前後輩出せし其の中にも、天胤より出で、大難をふせぎ、四方忠義の士を鼓舞せしは、兵部卿の宮、征東大將軍の宮、征西大將軍の宮なり。義に死して、風節凜然たるは、皇太子、および、東國管領の宮、征夷大將軍の宮なり。時勢に明にして、幾微を察し、諫諍に、忠誠をつくされし良臣は、萬里小路藤房卿なり。ふと

第十七課

艱難の中に在りて、大義を明にし、義士の氣を作興せしは、北畠の親房卿なり。危難の間に周

旋し、乗輿を、つゝ、かなく、還幸なしまるらし、は、千種の忠顯卿なり。事のはじめより、密議にあづかり、諸國の義士を募りしは、中辨俊基朝臣、中納言資朝卿、具行卿等の人々なり。身と以て、玉體にかはり、乗輿を、危難に脱れさせまつりしは、花山院の文貞公なり。兵間にありて、あはく、矢石ををかし、辛勞勤苦せしは、鎮守府將軍顯家卿をはじめとして、四條の贈左大臣隆資公、左大臣實世公等なり。武家の人々には、義兵をあけて、鎌倉を一掃し、北條を殄滅し、高氏を、あはく、窘蹙せしめし元勳は、新田



ること久し。然るに、今、新羅は、東班の上位に列せられ、我は、西班の第二位に列せられ、かへりて、彼の下に在り。今日の儀式は、豈、かくの如くなるべけむやと。意氣、凜然として、席につくことを肯ぜず。將軍吳懷寶、これを見て、たゞちに、席次をあらため、新羅の使を、西班の第二位に下し、我が使を、東班の第一位に列せしめて、其の儀をへけり。古來、海外に使して、君命をはつかしめず、國威をおとさず、祖先の志を紹述して、忠勤をいたせる古麻呂の如き類、亦、すくなからざるなり。

第十九課

此レ、我が國體ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、亦、實ニ、此ニ存ス。

我が國は、天地開闢のはじめより、萬世一系の天皇、君臨ましく、皇室と、國家とは、かならず、相離るべからざることを、たえて、外國にためしなき國體なり。されば、忠といひ、孝といひ、愛國といふは、其の名ことなりといへども、其の義は、みな、一にして、さらに、差別あることなし。ゆゑに、臣民の、忠孝を以て、百行の基とし、之に則りて、世々、萬國無比の美風をなせるは、我

が國體の純粹精美なる光彩にして、實に、國民教育の淵源なり。此の特殊なる美風は、世界各國に、其の例なきところなれば、これを、萬世無窮に維持せざるべからず。是かるに、もし、教育の本旨をあやまり、其の義を失ふが如きことあらば、此の美風も、つひに、廢滅するにいたらむ。ゆゑに、我が國の教育は、よろしく、古來の歴史に徴し、風俗習慣に志たがひ、忠孝を本として、百行の規矩とし、現在、れよび、將來の臣民をして、祖先の如く、また、忠孝の人とならしめ、此の美風をして、あへて、失墜することなからし

むる様にせざるべかずと宣へるなるべし。

第二十課

天地の間に、萬國あり。萬國に、おのく、君ありて、其の國を治む。君あるものは、おのく、其の君をあふぎて、天とす。國々、みな、其の内をたふとびて、外をいやしとすること、同じき理なれば、たがひに、已が國をたふとび、他國を、夷蠻戎とすること、これ、亦、さなまれる習なり。されども、萬國には、みな、易姓革命といふことありて、其の國みたるゝときは、或は、其の君を弑し、或は、是をはなち、或は、寡婦孤兒をあざむきて、其

の禪をうけ、或は、世嗣絶ゆるときは、他姓のものゝ以て、其の位をつがしむる類にして、其の君の種姓、他にうつること、國として、是なきものあらず。これ、其の天とする所、若くは、かはる習なれば、其の天地といへるも、小天地にして、其の君臣といへるも、小朝廷あり。萬國の中に、たゞ、神州のみは、天地開闢せしより以來、天日嗣、無窮につたへて、一系綿々として、庶民の、天とあふぎ奉る所の皇統、かはらせ給はす。これ、其の天とするところの大なる事、宇内に比なし。今、この萬民、天地の間にならびなき

國にうまれながら、吾が國體を知らざるべし
むや。起衆篇

第二十一課

爾臣民、

前文は、歴史の大要をのべさせ給ひ、これより、
臣民が、おのゝ、ふみ行ふべき修身の綱領を
おめさせ給はむとして、更に、爾臣民と、おたし
く、よび起させ給へるなるべし。

父母ニ孝ニ、

父母は、我を生み、我をそたて、生涯、劬勞するも
のなれば、子たるもの、其の恩を忘るゝことな

兄弟ニ友ニ、

く、よく、敬愛を以て、之に事へ、父母の心を、つね
に、安樂にして、平和なるやうに、孝養をつくさ
ざるべからずと宣へるなるべし。さて、父母に
事へて、孝養をこたりなきは、則、君に對し奉り
て、忠義なるなり。また、父母に孝なるものは、夫
婦、兄弟、朋友に對するも、亦、皆、信實なるものな
り。ゆゑに、孝は、百行の由りてれたる所の本な
れば、まづ、此の大綱と、第一にあけさせ給へる
なるべし。

兄弟は、おなじ幹より、わかれたる枝の如きも

ぐることも能はず、藁席に坐し、瓦缸をあけて、禮を卒へしを以てなり。秀吉薨するにおよびて、髪をけづり、庶子秀頼を視ること、なほ、其の自生のとどくし、親屬諸將をして、これを輔翼せしめたり。

第二十三課

朋友相信シ、

朋友の交は、たがひに、信義をあつくせよと宣へるなるべし。信とは、言行ともに違はず、欺かず、侮らざるをいふ。朋友ありとも、相信せざるときは、惡をもいさむること能はず、善をも勸

むること能はず、自他のために、損れはくして、益する所なかるべし。人世に立ちては、朋友の交はど、大切なるものなし。故に、かならず、信義とまもりて、其の道をうしなふべからず。

上古の時、大國主命、父尊の遺業をつぎて、この國土を經營せむと欲し、たましく、海邊にいで給へるに、小舟に乗りて、寄り來ませる神あり。命、誰ぞと問ひ給へば、吾は、少彥名命なり。天神の命を奉じ、御身とともに、力をあはせて、國土を經營せむために來れりと宣ひて、それより、たがひに、信義を厚くし、何事にも、相志たしむ

て、違背することなく、水土を平け、山川に名つけ、草木を繁くし、蘆葦を植ゑ、酒をかもし、梁をほどこし、人民のために、醫藥、禁厭の法をまうけ、患難、相すくひ、出入、相ともなひ、つひに、祖宗の遺業とをさめて、天下經營の功をとけ給へり。朋友の、信義を厚くすべきこと、誰も、當に、此の二神の如くならざるべからざるなり。

第二十四課

恭儉、已ヲ持シ、博愛、衆ニ及ボシ、

人、傲慢無禮なるときは、信を、世に得ること能はざるのみならず、他人のために擯斥せられ

て、禍をまねき、恨を受け、つひに、一身を保持すべからざるにいたる。また、何事も、節約檢束せずして、心のまゝに、うちふるまふ時は、いかに、富貴なる人といへども、忽に零落して、世に立ち得られざるにいたるべし。いはんや、貧者に於いてをや。故に、萬事鄭重にして、謙讓をまもり、謹慎にして、節儉をむねとし、ひろく、人を愛して、徳を、世にほどこすべし。而して、近きより遠きに、親しきより疎きにおよほすべきは、慈善をなすべき順序にして、近親を後にして、遠疎を先にするは、博愛の道にもとるものなり。

ゆゑに、まづ、父母、兄弟、親戚、朋友よりはむめて、他の衆人におよほすべしと宣へるなるべし。

第二十五課

學ヲ修メ、業ヲ習ヒ、以テ、智能ヲ啓發シ、德器ヲ成シ、

人は、學習の効によらざれば、以て、智を啓き、器と成すこと難く、才德なくしては、決して、世に立ち、己が本分を全うすることを得べからざるなり。されば、學問を勉強し、職業を習熟し、智德を増進して、有爲の人となり。世に、益をなさんことをつとむべし。而して、人の智識とは、正

義にもとづき、正道にあらがひて、其の才を用ゐることにして、もし、行、その義に由らざるときは、これを、智識といふべからず。かへりて、身をあやまり。世の禍をなすにいたるものなり。故に、百般の學習、みな、まづ、其の心志を正明にせんことを勉むべし。いやしくも、其の心、正しからざれば、いかに、學業秀づるも、決して、善良の臣民たる能はざるものなり。これ、德器を成就すべしと宣へる所以なるべし。

第二十六課

中江藤樹は、近江の人なり。幼より、學を好み、そ



の行、あたかも、老成人の如く、勤勉をこたることなく、終に、一家をなせり。而して、其の學、文辭をよろこばず、躬行實踐を主とし、つねに、四民をあつめて、人倫の道を説き、善にうつり、惡を去らしめ、教導訓誡すること、はなはた、懇切なりき。また、常に、貧をあらはれみ、孤をめぐみて、恩をはぐこし、徳を積みて怠ることなかりしかば、一郷、ことごとく、之に服し、藤樹を稱して、近江聖人といへり。嘗て、夜、郊外よりかへれるに、數人の賊ありて、藤樹を要し、金囊、および、衣服をうばひ去らむとせしも、既にして、その藤樹

なることを知り、大に、その無禮を悔いて、百方陳謝せり。藤樹、之をさとして、良民とならしめき。藤樹死にて後、一人の士あり。近江をすぎ、その墳墓に詣でむと欲し、道を、農夫に問ひけるに、農夫、即、鋤をすて、家に入り、禮服を着て、之をみちびき、洒掃敬拜せしかば、士人、之をいぶかり、藤樹の縁類なるかと問ふ。農夫、答へて曰はく、いな、吾は、緣故あるものにあらざるなり。そもく、先生を欣慕するもの、たゞに、吾一人のみならず、吾が一郷、ことごとく、然らざるはなし。吾等の父老、常に、子弟にかたりて、我が里、

父子禮あり、兄弟友あり、家に、忿爭叱罵の聲なく、一郷、和氣雍々たるものは、みな、藤樹先生の遺教による。汝等、つゝ、しみて、先生の恩を忘るること勿れといへり。故に、此の如きのみと。是において、士、容を正して、敬拜、ますく、恭しく、あつく、農夫に禮して去れりとぞ。

第二十七課

進

ンデ、公益ヲ廣メ、世務ヲ開キ、

人の、學問をつとめ、智能をみがきて、徳器を成すは、ひとり、已一身の爲のみならず、かならず、衆人の公益をなし、世の業務をひらき進め

むがためなり。いかほど、學問技藝、世にすぐれ、或は、富裕の身なりとも、已一身の安樂のみを貪りて、世を益することをなさざれば、未、人たる本分を全うせるものとはいふべからず。畢竟、已の才識を琢磨するは、この本分を全うせむがためなれば、行を正しくし、人をあはれみ、世を益し、惠を、天下後世にのこして、仰ぎては、祖先に恥ぢず。俯しては、遺範を、子孫にのこし、以て、御國の光華を添へむことを心掛くべきなり。ゆゑに、前文に、德器を成就しと宣ひ、此に進みてとは宣へるなるべし。

佐藤信淵は、出羽國の人なり。幼き時より、國を治め、世を濟ふ志はなはた、深かりき。年十三の時、父に志たがひて、蝦夷にわたり、ついで、奥羽關東を周遊し、足尾銅山に入り、父につきて、銅鑛を分析する法をまなべり。十六の年、父、死にしかば、江戸にいで、刻苦勉勵して、蘭學をせよめ、天文、地理、曆算、測量の術を講究し、つひに、列國の大勢、政體の大要におよぶまで、通ぜざる所なきにいたれり。これより、西にゆき、東にかへり、或は、諸種の物産を探索研究し、或は、諸侯のために、治術、兵學を講じ、殖産、興業を説き、ま

た、書をあらはして、これを獻じなせり。すべ
て、全國、足跡のれよぶ所、みな、興益の法を授け
ずといふことなし。また、世の困窮なるものを
救はむこととはかり、諸種の書をあらはして、
これを、幕府に獻じたり。その濟世の志のふか
き、つねに、四方に奔走して、ほとんど、寧處に遑
なきはせなれども、手に、筆をすてず、神力をつ
くして、著作を怠ることなし。また、自信するこ
と、甚、あつくして、世の毀譽得喪を以て、すこし
も、意とせず。平生おもへらく、吾が説、今日に用
ゐられざるも、後世、かならず、資りて、以て、宇内

を一新する君あるべきなりと。明治のはじめ
に及び、信淵の著書、大に、世にあらはれ、その農
政學の卓絶なるを知らざるものなきに至れ
り。明治十五年、朝廷、その功績を賞して、正五
位を追賜せさせ給へり。

第二十八課

吉田了以は、山城國嵯峨の人なり。角倉といふ
ところに居りしかば、家號を、角倉といへり。慶
長九年の頃、美作國にゆき、和氣川の麒麟船を見
て、川に、船を通ぜしむべきことをさとり、やが
て、嵯峨にかへり、大堰川をさかのぼりて、丹波

の保津にいたる水路を撿し、自、たもへらく、川に、湍石おほけれども、船をやることを得べしと。其の明年、其の子立之を、江戸につかはして、大堰川に、舟行の業をおこさむことを、幕府に請はしむ。幕府、これを許し、かば、即、大堰川とさらへ、丹波の世喜村より、嵯峨にいたるまで、運輸の便をひらきぬ。後、さらに、命をうけて、富士川に、船路を開き、甲斐の鰍澤より、駿河の岩淵に通ぜしめしかば、兩國の民、大に、便益をえたり。其の後、また、幕府に請ひ、鴨川の水を疏通して、二條より、伏見に達せしめぬ。高瀬川とい

ふは、即、これなり。酒船を通すること、日に盛なり。了以の、舟路運輸の便を開きしところ、みな、今にいたるまで、なほ、盛にして、其の利益をうるもの、擧げて數ふべからず。了以の功、實に、偉大なりといふべし。

第二十九課

常ニ、國憲ヲ重ンジ、國法ニ遵ヒ、

國に、法度あるは、猶、人に、禮節あるが如し。禮節なければ、正しき人といふべからず。國法を遵守せざれば、正しき臣民とはいふことを得ざるなり。禮節をやぶれば、悖德の人となり、國法

ををかせば、非違の罪におちいる。人の恥辱に、種々ありといへども、罪人となるより甚しきはなし。上は、不忠不義の臣となり、下は、不孝不貞の人となる。豈、おそれ慎まざるべけむや。ことに、我が國の憲法は、皇祖、皇宗の遺範にかむがみ、臣民をして、遵由する所を知らしめむとの優渥なる叡慮によりて、制定せさせ給ひたるものにして、これを發布せさせ給ふ前には、陛下、またしく、誥文とさしけ、皇祖、皇宗の神靈に告げて、之を欽定せさせ給へるものなり。されば、いやしくも、我が大日本の邦

土に生息する臣民たるものは、つゝしみて、之を遵守尊重し奉らざるべからず。故に、つねに、國憲を重むじ、國法に従ふべしとは宣ひたるなるべし。

第三十課

明治二十二年二月十一日、今上天皇、祖宗の神靈に誥けて宣はく、
皇朕れ、謹みかしこみ、皇祖、皇宗の神靈に誥け白さく、皇朕れ、天壤無窮の宏謨にまたがひ、惟神の寶祚を承繼し、舊圖を保持し、あへて、失墜することなし。かへりみるに、世局の

進運にあたり、人文の發達にあたり、よろしく、皇祖、皇宗の遺訓を明徴にし、典憲を成立し、條章を昭示し、内は、以て、子孫の率由する所となし、外は、以て、臣民翼贊の道をひろめ、永遠に遵行せしめ、ますく、國家の丕基を鞏固にし、八洲民生の慶福を増進すべし。こゝに、皇室典範、たよび、憲法を制定す。惟ふに、これ、皆、皇祖、皇宗の後裔にのこしたまへる統治の洪範を紹述するに外ならず。而して、朕が躬におよびて、時と俱に、奉行することを得るは、洵に、皇祖、皇宗、および、我が皇考の威靈

に倚藉するに由らざるはなし。皇朕れ、あふぎて、皇祖、皇宗、および、皇考の神祐をいのり、併せて、朕が現在、および、將來に、臣民に率先し、此の憲章を履行して、愆らざらむことをちかふ。こひねがはくは、神靈、これを鑒みたまへ。

第三十一課

一旦、緩急アレバ、義勇、公ニ奉ジ、大日本帝國は、東海の中に屹立し、氣候風土、ともに、善美にして、おのづから、萬國に冠たる特殊の形勢をそなへたれども、一葦の海水をへ

たて、各國と、相隣りたれば、國防のいましめ、
一日も、忽にすべからず。古來、外邦の、我が國を
うかゞふこと、度々ありしかども、上には、歴
世聖皇の、稜威をかゞやかさせ給ひ、下には、臣
民祖先の、義勇の氣象に富めりしかば、すこし
も、他の侮を受けざりしのみならず、皇化は、
とほく、三韓、肅慎、渤海等の國々にねよび、我に
服して、ながく、朝貢せしことありき。然るに、今
日にいたり、若、義勇をわすれ、國の元氣をねど
して、御國の威嚴を損するが如きことあらむ
には、たゞに、祖先の遺風とはつかしむるのみ

ならず、皇祖、皇宗の神靈に對し奉りて、恐
懼に堪へざることなり。ゆゑに、一旦、事ある時
は、臣民、舉りて、正義勇武の氣象を振起し、以て、
君國のために、心とくなき、力をつくすべしと
宣へるなるべし。

第三十二課

吉田矩方は、松陰と號し、長門國萩の藩士なり。
嘉永、安政のころ、外舶、あきりに、邊海をうかゞ
ひ、國事、日に多端なり。矩方たもへらく、此の時
にあたりて、力を、國家につくさむには、よろし
く、外國に渡り、ひろく、彼の事情を視察し、以て、

おもむろに、策をなすに如かざるべしと。たま
たま、魯西亞の軍艦、長崎に泊れりと聞き、これ
に投じて、彼の國に航せむと欲し、いたれば、す
でに去れる後なり。矩方、大に失望して、また、江
戸にかへる。其の後、亞米利加の軍艦、下田に來
りしかば、機失ふべからずと、金子重輔ととも
に、漁舟に乗りて、米艦にいたり、其の意を通ぜ
しに、許されずして、送りかへされ、獄に下さる。
既にして、藩主、こひて、これを、本國に檻致し、其
の意見を問ふ。矩方、時勢を論すること、甚、切なり。
其の後、幕府、ほしほしに、港を開き、五國と、

約をむすぶにおよび、大にいきどほり、書を、大
原三位に奉り、幕府の擅横を論難す。既にして、
老中間部詮勝、西上して、志士を收捕するにお
よび、死を決して、京に入り、之をさへむとし
て、事成らず。本藩、ふたへび、之を、獄につなぐむ
とす。たま、父常道、病あつきを以て、請ひて
とまり、看護す。既にして、病、少しく、間あり。常
道、欣びて曰はく、往け。一時に屈して、萬世に伸
ぶ。何を傷むことあらむと。後、つひに、幕府のた
めに、江戸に檻致せられて、斬に處せらる。時に、
年三十。辭世に曰はく、

身はたとひ武藏の野べに朽ちぬとも

留めおかましやまとたましひ

矩方、嘗て、松下村塾をひらき、大に、人才を養成せしが、みな、師の志をつぎて、力を、國事につくし、王政維新に際し、與りて、力あるもの、甚多かりき。

第三十三課

以テ、天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ、
世界各國は、皆、禪讓放伐の國がらなれども、ひとり、我が國の皇統のみは、皇祖の大御命のまに／＼、天地のあらむかぎり、連綿として、

かはらせ給ふことなし。故に、代々の皇上、臣民を視をなはすこと、子の如く、臣民は、又、皇上を敬ひたふとび奉ること、親の如くにして、楽しく、世を送り來りしものあれば、實に、我が國に生息する臣民はぞ、幸榮なるものはあらざるべし。されば、臣民たるものは、此の天壤無窮の皇室の隆運を擁護翼贊し奉り、ますます尊嚴ならしむるやう、力をつくさるべからず。これ、實に、臣民たるもの、本分なり。故に、此の如くは宣へるなるべし。
さかきとる三上の山に木綿かけて

いのる日嗣はなほやさかえむ新後撰
天地も昔にかはらず。日月も光を改めず。いは
んや三種の神器、世に現在し給へり。きはまり
あるべからざるは、我が國を治むる 寶祚な
り。あふぎて、尊み奉るべきは、日嗣をうけ給
ふ皇になむおはします。神皇正統記

第三十四課

天壤無窮の皇運を扶翼するは、國の富强をい
たして、國威をかゝやかさむことを務むるに
あり。國威を、四表にかゝやかして、皇化にむ
かはしめむこと、神の深意もをはしますこと

なり。故に、祈年、月次等の祭の時、天照大神を
祝ぎ奉る詞に、皇神の見はるかします四方
の國は、天のかき立つきはみ、國のそき立つか
ざり、青雲のたなびくきはみ、白雲のたりむ
か伏すかざり、青海原は、棹柁はさす、舟の艦の
いたりといまらむきはみ、大海に、舟満てつゝ
けて、陸よりゆく道は、荷の緒ゆひかためて、盤
根、木根、履みさくみて、駒の爪のいたりといま
らむかざり、長道ひまなく、立ちつゝきて、狭き
國はひろく、峻しき國はたひらけく、遠き國は、
八十綱打ちかけて、引き寄する事の如く、皇

大御神のよざし奉らば、荷前は、皇大御神の大前に、横山の如く、打ち積みれきて、残をば、平けく聞しめせと宣へるも、皇化の、ひろく及びて、四表の國々までも被らむことは、天照大神の神意にもかなはせたまふ故なるべし。神州の民たらむもの、今日、歷朝の皇化に浴し、皇大神宮の末光をあふきて、國威を奮ひ、皇化を廣くせむと思ふ心もなく、蟲魚と同じく、世をすぐさむ事、神罰もおそるべく、又、已む心にも恥ぢざらむやは。廻舞篇參取

第三十五課



是ノ如キハ、獨、朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ、
又、以テ、爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン。
前項に示させ給へる事どもを、臣民、おのく、
克く行ひ、克くつくす時は、ひとり、皇上の御
爲に、誠忠善良なる臣民となるばかりにあら
す、祖先が、克く行ひ、克くつくしたる善美の遺
風をつぎて、ますく、これを顯彰發揚するに
足り、また、祖先に對して、孝行ともなるべし。故
に、臣民たるものは、能くく、聖旨を佩服して、
心力のおよばむかざり、盡すべしと宣へるな
るべし。

大伴家持が、其の祖先の遺風をのべし歌に曰
はく、

大伴の遠つかむおやの
負ひもちてつかへし官
山ゆかば草むすかはね
顧みはせじとことなて
いにしへゆいまの現に
おほともと佐伯の氏は
人の子は祖の名絶たす
言ひつけることの官ぞ
劍太刀としにとり佩き

その名をば大久米主と
海行かばみつつかはね
大君の側にこそ死なめ
大丈夫の清きその名を
流さへるおやの子等を
人の祖のたつる辭たて
大君にまつろふものと
あづさ弓手握り持ちて
朝なもり夕のまもり

大君のみかどのまもり
いやたて思ひしまさる
聞けばたふとみ

我をわきて人は不在と
れはさみの御言の幸と

萬葉集

第三十六課

又、族人を諭せる歌に曰はく、

久方のあまの戸ひらき
天皇のかみの御代より
眞麿箭を手挟みそへて
前にたて鞆とりおほせ
踏み通り國まざしつゝ
順へぬひとをも和はし

高千穂の岳にあまりし
はじ弓を手握りもたし
大久米のますら武夫を
山かはを磐根さくみて
ちはやぶる神を言向け
掃き清め仕へまつりて

秋津洲やまどのくいの
宮ばしら太知りたてゝ
すめらぎの天津日嗣と
かくさはぬあかさ心を
仕へ来る祖のつかさと
子孫のいやつぎぐに
聞くひとの鑑にせむを
おほろかに心おもひて
大伴の氏と名におへる

かしはらの畝火の宮に
天の下知らしめしける
繼て来る君が御代く
すめらべに極め盡して
辭立てゝ授けたまへる
見る人の語りつぎてゝ
可惜しき清きその名を
空言もおやの名たつな
ますらをのとも

萬葉集

第三十七課

るなるべし。

第三十八課

之ヲ、古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ、中外ニ施シテ悖ラズ、

斯の道は、皇祖、皇宗の遺訓に基き、天地と共に、成立し來れるものなれば、實に、天下の公道にして、萬古不易の大經なり。ゆゑに、之を、古今に通じて照準するも、少しも謬ることなく、又、國の内外に施したることなふとも、決して、悖戾することあるべからず。そもく、其の由る所を異にして、斯の道を破壊するが如きものは、

決して、我が國に施すこと能はざるも、斯の道にいたりては、世界各國、何處として、施されぬ所なし。これ、斯の道の、純精善美なる所以にして、天地のあらむかぎりは、一定不變の大道なりといふべし。

第三十九課

朕、爾臣民ト、俱ニ、拳々服膺シテ、咸、其德ヲ一二セシコトヲ庶幾フ。

前數項に、既に述べたる如く、斯の道は、天地の間、たゞ、我が國にのみ、特有して、他に、比例なき大經なり。而して、仁德を以て、下民をひきゐる、

二にせざるにあり。而して、上下の隔絶、衆心の離反は、實に、道德の基本を異にするに源因するものなれば、我が國の臣民たるものは、此の聖勅にあらがひ奉り、固有の皇道を遵守して、以て、其の道德の基本と一にせざるべからず。若、この皇道にそむき、他に從ふが如きことあらば、其の道德の基本を異にするを以て、萬民、一致結合すること能はずして、つひに、國威を衰頹せしむるにいたらむ。これ、實に、聖勅に乖戾して、國家に容れざる不忠不義の罪人にして、我が國の臣民とはいふべからざるなり。

臣民たるもの、豈、謹みても、猶、謹まざるべけむや。

等 高 小學修身書卷之四 終

明治二十五年九月二十五日印刷
 明治二十六年十月三日發行
 明治廿六年十二月卅一日訂正再版印刷
 明治二十七年一月七日訂正再版發行
 九月十五日校訂三版印刷
 九月十八日校訂三版發行

定價金拾錢

著 者 伯爵

東久世通

東京市麻布區本村町百八番地

西 澤 之

東京市京橋區築地二丁目廿番地

國 光 社 圖 書

東京市京橋區築地二丁目廿番地

版權 所有

發行 者 印刷 者

發 兌



図書 和図書 遡



a 1 3 8 4 1 2 3 0 6 1 a

福岡教育大学蔵書